

氏名	土川 祥
学位の種類	修士 (看護学)
学位記番号	修士 第 137 号
学位授与年月日	平成23年3月10日
学位論文題目	分娩後の骨盤底弛緩に対する縦断的介入研究 ー骨盤底筋体操とサポート下着の比較ー

論 文 内 容 要 旨

※整理番号	142	(ふりがな) 氏名	つちかわ きち 土川 祥
修士論文題目	分娩後の骨盤底弛緩に対する縦断的介入研究 —骨盤底筋体操とサポート下着の比較—		
<p>【目的】 骨盤底筋体操およびサポート下着着用による分娩後の骨盤底弛緩に対する回復効果について比較検討することを目的とした。分娩後 4 週目から分娩後 16 週目の 12 週間の骨盤底筋体操およびサポート下着着用による介入効果を膀胱頸部の位置と可動性、および継続性、簡便性、利便性を比較することから明らかにする。この検証に際し、次の 3 つを仮説とした。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 褥婦は未産婦と比較し、形態学的に骨盤内臓器の下垂が認められる。 2. 骨盤底筋体操およびサポート下着着用は、分娩後の骨盤底弛緩の回復に効果がある。 3. 骨盤底筋体操用 CD およびサポート下着は分娩後の骨盤底弛緩に対し、継続性、簡便性、利便性で有用なツールである。 <p>【方法】 まず、経膈分娩後の褥婦 40 名と未産婦 24 名を対象として、骨盤底弛緩について形態学的に検証した。次に、経膈分娩後の褥婦 38 名を無作為化にて骨盤底筋体操群 14 名、サポート下着群 13 名、対照群 11 名、に振り分け、骨盤底筋体操、およびサポート下着着用による骨盤底弛緩の回復効果について検証した。骨盤底筋体操用 CD とサポート下着を実験用具として 12 週間の縦断的方法による実験を実施した。膀胱頸部の位置および上下への可動性を、縦型オープン MR により評価した。</p> <p>【結果】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 分娩後 4 週目の褥婦と未産婦において、褥婦群の方が未産婦群と比較して、膀胱頸部の位置は低く、膀胱頸部の上方への可動性が小さく、下方への可動性は大きかった。褥婦群を、尿失禁・便失禁の自覚症状の有無で分類し、膀胱頸部の位置および可動性を比較したが、有意な差はみられなかった。 2. 骨盤底筋体操を 12 週間に推奨回数 (1 日 2 セット以上) 実施した場合と、サポート下着を 12 週間に推奨時間 (1 日 5 時間以上) 着用した場合は、分娩後 16 週目の下方への可動性が小さくなり、未産婦と比較して有意な差はみられなかった。一方、対照群は、未産婦群と比較して分娩後 16 週目の安静時および負荷時の膀胱頸部位置が低かった。 3. 骨盤底筋体操用 CD およびサポート下着は、高い継続率を示し、簡便性、利便性に関し、高い評価を示した。 <p>【考察】 本研究の結果から、分娩後の女性は自覚症状に関係なく、未産婦と比較し骨盤内臓器の下垂が形態学的に認められた。また、日常生活を送ることに加えて骨盤底筋体操を推奨回数実施すること、もしくはサポート下着を推奨時間着用することが、分娩後の骨盤底弛緩の回復において有用であるといえる。さらに、骨盤底筋体操用 CD およびサポート下着は、育児を優先しセルフケアの意識が低い時期においても、分娩後の骨盤底弛緩に対し継続性、簡便性、利便性の高いツールであると考えられる。</p> <p>【総括】 推奨された回数の骨盤底筋体操もしくは推奨された時間のサポート下着着用を実施した場合には、分娩後の骨盤底弛緩に対する回復効果が示された。この 2 つの方法を個人の価値観やライフスタイルに合わせて応用することが、より多くの分娩後の女性の骨盤底弛緩回復に向けたケアにつながり、QOL の向上につながることを期待できる。</p>			

(備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)

2. ※印の欄には記入しないこと。